

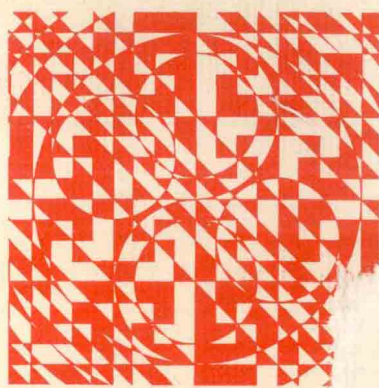
岩波講座

文学

1

文学表現とはどのような行為か

岩波書店



岩波講座 文学

1

文学表現とはどのような行為か

岩波

岩波書店

〈執筆者紹介〉

- 野 間 宏（のま ひろし） 1915 年生 作家 『暗い絵』『青年の環』
- 大江健三郎（おおえ けんざぶろう） 1935 年生 作家 『洪水はわが魂に及び』『状況へ』
- 寺 田 透（てらだ とおる） 1915 年生 文芸評論家 『道元の言語宇宙』『万葉の女流歌人』
- 埴 谷 雄 高（はにや ゆたか） 1910 年生 作家・文芸評論家 『闇のなかの黒い馬』『死霊』
- 木 下 順 二（きのした じゅんじ） 1914 年生 劇作家 『沖繩』『神と人とのあいだ』
- 杉本秀太郎（すぎもと ひでたろう） 1931 年生 フランス文学 『大田垣蓮月』 フォション『形の生命』 訳
- 大 岡 昇 平（おおおか しょうへい） 1909 年生 作家 『俘虜記』『レイテ戦記』
- 武 満 徹（たけみつ とおる） 1930 年生 作曲家 『音、沈黙と測りあえるほどに』『樹の鏡、草原の鏡』
- 高 階 秀 爾（たかしな しゅうじ） 1932 年生 美術評論家 『名画を見る眼』『ルネッサンスの光と闇』
- 磯 崎 新（いそざき あらた） 1931 年生 建築家 『空間へ』『建築の解体』
- 大 森 莊 蔵（おおもり しょうぞう） 1921 年生 哲学 『言語・知覚・世界』 講座『哲学』第2巻（編著、東大出版会）
- 猪 野 謙 二（いの けんじ） 1913 年生 日本文学 『明治の作家』『日本近代文学史研究』
- 平 野 謙（ひらの けん） 1907 年生 1978 年没 文芸評論家 『芸術と実生活』『昭和文学の可能性』
- なだ いなだ 1929 年生 作家・精神科医 『権威と権力』『しおれし花飾りのごとく』
- 小 田 実（おだ まこと） 1932 年生 作家 『状況から』『オ島』

岩波講座『文学』1 文学表現とはどのような行為か（全12巻 第1回配本）

1975 年 12 月 1 日 第 1 刷発行 ©

1979 年 10 月 15 日 第 2 刷発行

¥ 1900

発行者：緑 川 亨／発行所：〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替 東京 6-26240／印刷：精興社 製本：松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩波講座
文学
1

目次

I 文学とはなにか

- 1 現代文明の危機のなかの文学……………野間 宏……………三
——なぜ今日文学を問題にするか……………
- 2 なぜ人間は文学をつくり出すか……………大江健三郎……………元
- 3 文学の運命……………寺田 透……………七

II 表現とはどのような行為か

- 1 表現者とは何か……………埴谷雄高……………三
- 2 全体の表現と個の表現……………木下順二……………一〇
- 3 スティールとフォルム……………杉本秀太郎……………二五

III 表現の構造について

- 1 文学表現の特質……………大岡昇平……………一五
- 2 文学と対比される表現の構造……………

a	音		武満	徹	二六
	——鏡と卵 a mirror and an egg				

b	絵		高階秀爾	二七
	——「詩は絵の如く」の伝統をめぐって			

c	建築		磯崎新	二四
---	----	-------	-----	---------

3	言い現わし、立ち現われ		大森荘蔵	三三
	——日常言語の中で			

IV なぜ人間は文学を求めるか

1	読者の参与		猪野謙二	二四
---	-------	-------	------	---------

2	『甲乙丙丁』の読者		平野謙	二六
---	-----------	-------	-----	---------

3	メディアを持たない人々の表現		なだいなだ	二五
	——どこに書くかの問題			

4	「表現を奪われる」「表現を奪う」		小田実	三八
---	------------------	-------	-----	---------

I

文学とはなにか

1 現代文明の危機のなかの文学

——なぜ今日文学を問題にするか

野 間 宏

巨大な工業生産活動によって自然に於ける循環が極度に破壊され、ついにその限度に達しようとして人類の生存が
おびやかされているとの警告をすでに多くの人々がきいている。日本の文学者もまた、当然のことであるが、それを
放置することは出来なかったし、また実際に放置しはしなかった。

自然から生れきた人間が、自然を破壊するという、自然と人間との乖離。そこから生じる人間にとっての、これま
での人間の経験の一切を越える、まず理解しがたい、したがってその解決もまた、きわめて困難な事情が人間の上に
訪れてきている。そしてこれをめぐる年月をかけてつづけてきた討論は、じつにけわしい道を行かなければならない、
人類のこれからの歩みを文学者に思い知らせる。

それは危機というこれまでしばしば使われてきた言葉によっては、とらえられないような、巨大な規模と複雑な解
きがたい組み合わせをそなえて、人類の上に落ちて来ているのである。文学がそのすぐ前に立たされている問題とし
て、文学はそれに接近して、それがどのような姿、形をとって現れているか、さらに将来どのような姿、形に変化す

ることになるのか、その構造と変換、その移動、そしてその終局などについて明らかにし、それが如何なるものであるのかを見、はたしてその解決は可能か否か、可能であるとすれば、如何なる方法をもってするのかを、その文学理論をもって問いつめなければならぬことを文学者は心底に収めてきた。

しかし文学もまた自然と人間の極度の乖離によって生じたその深い裂け目のただなかに落ち込み、そこから匍い上り抜け出す方途を見出すには、すでにその険しい狭間の瘴氣しやうきにあてられすぎていると感じなければならなかった。日本文学は、文明にかかわる機能を欠いてから、すでに久しいのである。

まず、このことを明らかにして、日本文学は、自身にそなわる一切の力を投じて、自身の力の限界を測定し、それ自身を変えなければならぬだろう。

人類の生存がおびやかされているこの警告、それはヨーロッパの終焉、或は現代文明の危機の警告とも言われる。このヨーロッパの終焉と言われ、或は現代文明・文化の危機とよばれるものに、かわることを文学が避けることは出来ない。人間の前に訪れている問題がいかに見定めがたいものであらうと、また絶望をもたらしものであらうと、それに眼をふさぐなどというところに文学はなかったし、またないからである。

もともと人間はその一人一人がたえずかつてないその生を生きその死を死ぬといつてよく、その一人一人の相異なる生とそして死を、その辺りに見えかくれする見定めがたいおびただしい幻覚や幻聴を見つけたし、それを取り払い、見とどけてきたのである。文学は人間一人一人の欠如しているところを見きわめ、そこに入りこむことによって、その生死の全体に迫るのである。

しかし人間は決してただ人間自体の存在によって自己完結しその生を生きその死を死んでいるものでないことは、説明するまでもないことである。人間は人間を取り巻くもののなかにあってその生を生き、その死を死ぬのである。

「人間と人間を取巻いているものを、同時にとらえることこそは、私が作品を書くにあたって中心にしている一つの目標であった。」とかつて私は書いています。人間と人間をとり巻くものを、それが動いているままに同時にとらえることは、私が文学創造を行う時、その中心においている最も重要な目標の一つである。「戦争は人間と人間を取巻いているものの関係が、決して人間と人間を置く場所との関係というような静かなものではなく、またそれ以前の文学のなかで明らかにされていた人間と環境との関係というようなものではないことを明らかにした。」とも私はかつて「感覚と欲望と物について」という文章のなかで書いています。

とはいえ、いまや、戦争そのものをその内につつま込んでいてもいようなまことに巨大な変動を人類が迎えていると警告した人たちは、人間と人間を取りまく環境、この二つの結んでいる関係は、これまでのあらゆる学問、芸術、文学が追及してきたところとは非常に異なった構造をもつものとして、成立していることを明らかにしてきたのである。生物学に物理学を導入し、生物の生命活動の構造と機能を分子の段階でつきとめることに成功した生物物理学、分子生物学を始めとする現代の諸生物学は、生物の生命活動と環境との密接な相互作用、その相互作用にしさかでも損傷が生じる時、生命活動の様態の大きな変化を見なければならぬ程の密接な相互作用、その相互作用の中心のところに置かれていたものを科学の理論として、引き出す入口に立つのに成功しているのである。

最初に私が明らかにした自然と人間の極度の乖離によって、人間の落ち込む難局についてはよく警告を発したのは、すでによく知られているように、分子生物学者を中軸とする現代の生物学者たちであって、私は、J・モノー、バーネット、テイラー、ルネ・デュボス、バリイ・コモナー、ルリアその他の名前をここにかかげておかなければならない。生物の生命活動と環境の間の密接な相互作用を説明するにいたった生物物理学者、分子生物学者、生態学者、免疫学者などをはじめとする現代生物学者その他のほかには、現在、人間の前におかれ、日々、人類に迫りつづけ、その個

としての生命の死と、その種としての生命の死をもたらそうとしている二十世紀後半から二十一世紀にかけてのじつに重大な問題の所在を提示することは不可能なことだったのである。

しかしいま、人間の行く手をさえぎっているものは、まことに巨大であって、自然と人間の全領域にわたっており、到底文学の手におえるものではないともいえる。ことにそれは日本文学にとっては、まったく不案内な問題なのである。しかもそれはこの日本に於て、もっともきびしく迫って来ていて、世界の何処よりも、その症状というべきものは、重い。しかし日本文学は、まことにそれが日本文学であって、しかも世界文学であるものとして、歩もうとするならば、むしろそれを自身の身近に誘い、導き、引き寄せなければならぬだろう。いや、それは文学が、それを、その身近に引き寄せるようなことをしなくとも、すでにそれは、向うから日本文学のなか深くに侵入し、入り込んでしまっているのである。それは日本文学を犯している。

このように考えると日本文学は、この人間の行く手をさえぎっているものの本体を見とどけるためには、自身のうちに侵入しているそれを、まず覗き込むことから始めればよいと言えるだろうか。たしかに日本文学はそのようにしてこの重大な問題への接近を始める必要がある。とはいえ、このことも、またそれほど簡単なことではなく、これを、実行に移してみればすぐにもそれが解るだろう。

私はここでこのことを強調しておかなければならない。ごく最近、一、二年の間に一層大きな発展をとげた分子遺伝学、生命科学の実験そのものが、大きな危険を人類にもたらす可能性のあることが、明らかにされてきているからである。人類の行く手に置かれている危険な爆発物を予測し、それについて警告を発する根拠となる理論を成立させた、当の分子遺伝学、また生命科学ライフサイエンスそのものが、人類の生存の危険を予告したG・R・テイラーが言うところをはるかに越えて、人類の落ち込む可能性のある難局を、むしろ引きよせ、個人死の喪失、自然死の紛失時代を一層特徴づ

ける大量死を発生させるもつとも恐るべき当事者になりかねないということが、見えてきはじめてた故なのである。

それは一九七四年七月アメリカのポール・バァーグ教授を責任者として世界の生物学者に出された遺伝子の組み替え実験の危険の可能性にかかわる手紙によって明るみに出された。そしてそれはその実験中止の呼びかけの手紙により一九七五年二月、アメリカのアジロマーに於て世界の学者による国際会議がひらかれた結果、厳密な安全性の条件、基準をみたす実験室と施設を用い、実験することはよしという決議の出されたというところにもよく現れている。

この実験をめぐる、この実験の大きな危険性を認める科学者と、それはあくまで危険の可能性にとどまるとする科学者との間の相違があらわになるのである。この相違の幅の大いさにより、一層、問題は深みに沈み、科学と技術、科学者と技術者にたいする疑問と不信が大きく引き起されることとなる。しかしこの問題については、科学・技術、科学者・技術者の人間及び社会にたいする責任をふくむ問題として後で取扱うことにしよう。

現代生物学の生命についての理論の確立なくしては、今日の人間を取巻く、じつにけわしい環境破壊・汚染（公害）の問題を人間が見出すことが出来なかったことは明らかなことである。しかしその生命についての理論が生物の一つである人間の生命に適用され、人間の生命活動と自然のなかに形成されたその環境との相互作用がようやくして明らかに始める時、現在の人間の生命活動のすぐ下のところに時限爆薬ともいふべきものを人間自身が仕掛けているという不可解なことがら（しかも二十一世紀に於ける人類生存の条件がといわれる程にも切迫したその時限）が、生物学者によって読みとられるばかりになったということとは、人間と自然の関係の不思議さに思いを向けさせる。

生物の一つとして人間を見るという当然のことであって、しかも非常に重要なことを、生物物理学者、分子生物学者、その他現代生物学者は明示してくれたと言うべきである。このことを多くの人間はまったく悲しむべきことではあるが、長い年月忘却してしまっていたのだ。とはいえ、私はもちろん人間を決して生物学的にのみとらえようとする

るところにとどまろうとするものではない。しかしせっかくという言葉を私はここに使いたいのだが、折角生物物理学、分子生物学、現代生物学が思い起させてくれた、生物の一つとして人間を見るところ、このことを捨てて、ただただ人間と他の生物との差異・人間の持つ特異性を数えたてるところに行くならば、それはまた、従来の地球上のあらゆる生物の全生態系の重層性のなかに人間をおくことのない人間把握のところへ、再び舞い戻ってしまふことになる。私は考える。

繰り返すことになるが、地球が病んでいるという言葉によって示されているように、自然のうちに形成された環境は、すでに人間の生命活動の持続に適合することのないところに到達しようとしている。人間をこのような状態に置くことをもたらしたものは、何なのかと問うと、それはいまだどってきた、自然に於ける光合成を通して行われる物質の再構成と循環（水素、酸素、炭素、窒素、硫黄^{イオウ}、燐などの諸元素の自然循環）を破壊し去り、自然と人間の乖離をもたらし、ヨーロッパ文明の生成の根源のところに埋められている。これが分子生物学者をはじめとする現代生物学者の自己告発である。それはまことに大胆な自らの属するヨーロッパ文明そのものの告発、ヨーロッパの終焉、現代文明にたいする全面的懷疑と否認の表明である。

しかしヨーロッパの終焉とは何だろ。世界の分子生物学者をはじめとしてその他の生物学者たちの提出しているところを受けて、これを私の言葉を用い、しかもそれを出来る限り、その生物学者の提示するところから離れず、またそれを越えることのないように、注意して要約することにしよう。それは一言にしていえば、現代の自然科学の急激な発展とそれと結合することによって果される技術的手段の不断の改革による巨大な近代技術文明の前進によって、あらわにされた核兵器、核産業の問題をふくむ環境破壊、汚染（公害）の問題、資源とエネルギーの問題、食糧の問題を三つの柱とする、現代文明がそのうちにかかえている問題の提出である。また遺伝により数世代後に生れて

くる子供たちの健全な生命の保証はどこにもなく、その子供たちは、人間の姿とその生命活動を奪われていることが、予測される。このような問題のすぐ前に人類を導くこととなったヨーロッパ文明成立の根拠の破産宣告である。

しかしヨーロッパ文明・文化の成立の根拠の第一は何かと言うならば、それはなによりもまず、その文明の根底のところに置かれていた人類の概念であると私は考える。その人類の概念は、他の生物との循環関係にそなえることに不足している。私はいまここでこのことをはっきり言っておきたい。もちろんこの重大な問題について私の考えがここに到達する理由については後で精密に示さなければならない。しかしヨーロッパ文明の根拠としての、その人類の概念が破れようとしているとすれば、その人類の概念の変更が要求されるのは必然である。すればそれは同時に新しく生み出される人類の概念に相応する新しい自然の概念の確立が希求されることを意味しているのである。

核兵器を戦争手段として用いる核戦争による人類生存の危機の問題（この危機は、いま、また、これまでよりも、はるかに重大なものとなってきている）については、世界の原子物理学者がはやくとりあげ、物理学の領域を抜け出て世界の数多くの人々の参加する運動を拡げている。そして原子物理学者にたいする信頼は、保たれてきたばかりではなく、むしろ深まってきたと言つてよいだろう。世界の分子生物学者を中心とする現代生物学者たちは、さきの原子物理学者の例にならない、すでに述べたように自身のとらえた新しい形をした人類生存の危機の問題を提出したが、これはいまなお十全に現代世界に受け入れられているとはいいがたい。

この生物学者たちの地平の上にひろげた危機の姿は、余りにも奇怪な色をそなえた光に照しだされ、また染めあげられている故に、核戦争の危機のように、ただちに人々のとらえるところとはならず、またその解決のための方法、手続きの理論的解明の困難の故に、人々を従来の宗教的な終末観或はそれに類似のところへと導くこととなった。しかし、いま、この現代生物学者たちの提出した問題は、ようやく誤りなくある一定数の人々によって、核戦争、核兵

器の問題に重なり合う全人類史にかかわる問題として受けとめられ問題解決に多くの力を集める可能性を見るとところに行きつくことが出来たと言えるのである。もっともこのように言ったとしても、私は宗教的終末論を今日、あらたな眼によって見とけることの重要性を否定しているのではない。

現在人間がその前に立たされている問題は、全人類史にかかわっている問題であって、また全人類史のうちにこれまで現れきたった一切の文明類型を明らかにし、現代文明の危機を人類全体が脱出するための文明選択の問題でもある。あらゆる学問、芸術、文学も、いま、この危機に向って立つとき、その自己省察のうちにいりきることのないその構造と機能を、全人類史の鏡によって照し出されなければならないのである。しかしこの全人類史の鏡といわれるものは、いまは、何人の手のなかにあるわけでもなく、もちろん文学者の手のうちにあるわけでもない。

しかしすでに未開社会と先史学の両側に向けてひらいた文化人類学は現代生物学の提出した問題解決に大きな力をもたらすと考えられる領域を切り開いている。ライヘル・ドルマトフの『デサナ』(寺田和夫、友枝啓泰訳、岩波書店)その他に、私はその重要な成果を見出す。ここには人間を生物界のうちに、しっかりと位置づけることによって、そのエネルギーの循環を閉じられたものとするモデルが確立されているように見える。そしてその循環は中断されることなく流れてゆくのである。

デサナ族によれば、生の目的、人間のすべての行動と態度の目的は、社会の生物的、文化的な継続性にある。この目的は、人間が生物領界、つまり彼ら自身の社会内部および動物との間で確立している諸関係の、厳密な互酬組織によってのみ達成される。典型的なモデルは男女であり、内的な関係では、性は食に比較される。すなわち男は女をはらませ、女の方は子を生むわけだが、この循環現象と同じでもっとも小規模で速やかなのが食物の循環である。男はいわば蛋白質という栄養の範疇の生産者であり、女は炭水化物という相補的な食物を生産する。

毎日の料理によってこれらの食物は変化して人間が関与している新しいエネルギーを生み、こうしてより広汎な生産の循環の連続性が保証される。この互酬性は男が主として森という男性的空間で働き、女は菜園という女性的空間で働くという分業に根ざしている。これは社会的な面では、狩人である男と、漁撈・園耕者である女との間の外婚制を意味する。さらに工芸・技術の分野では品物の生産の専門化がある。カヌー、ざる、籠、カサバのおろし板、土器などは、それぞれ別の集団によって作られ交換される。女性を他の集団に与える一集団はまた、ある種の産物をも与えるから、理念的にはその集団はある食糧の生産者でもあって、それらはすべて女性の受け手の集団との間で交換されるのである。このシステムは競争を回避する。……(中略)。こうして、たんに各集団の別々の文化的規準の存続だけでなくその連続性が保証される。エネルギーの循環は、デサナ族のいうところによれば閉じているのであり、損耗は回復し、循環は中断されることなく流れてゆく。

しかし著者はもちろん、このモデルに存在する矛盾をつきとめている。そのところにいたって、このような未開の文明モデルにもそなわっている矛盾を見る眼がなければならぬことを、まるで撃たれるかのように読者は知らされる。次にそれを引いておこう。(このように言ったからといって、私は、決してエネルギーの循環が常に閉じられたものとするが、それだけでただちによいと考えるものではないことを明確にしておこう。)

これはかくあらねばならぬという図式である。……(中略)。循環は必ずしも常に閉じておくことはできない。性的抑圧が突然破れて、暴行、強姦という形をとるし、デサナ族で常に潜在的に存在している同性愛行動を増大させる。……(中略)。つまり蓄積された潜在力が循環にもどってゆかないのである。また森の動物はしだいに減少し、漁撈という中間相をへて、しだいに農業への依存度を高める。モデルは存続するけれども、それを続けるうえでの実際の困難はゆるやかに増大してゆく。